令和５年度 第42回

沼津市わたしの主張大会

沼津市教育委員会

令和五年度　第四十二回

沼津市わたしの主張大会

令和五年度 第四十二回 沼津市わたしの主張大会 開会挨拶

沼津市教育長　奥村 篤

第一回に出場した方々の年齢が五十代後半になることを踏まえますと、今年で四十二回目となるこの大会は、多くの先輩たちがこれまで積み重ねてきた誇りある大会であり、改めて歴史の重みや受け継がれてきた伝統を感じるものであります。

沼津市は七月一日に市制百周年を迎えました。この記念すべき節目の年を迎え、市民の皆様とお祝いするにあたり、『先人たちへの感謝と敬意』、『郷土への誇りと愛着』、『市民との協働』、そして、『次の百年への新たな一歩』をコンセプトとして様々なイベントが行われていますが、本大会に作品を寄せてくれた中学生の皆さんこそが、まさに、沼津市の次の百年を担う主人公であります。

突如として現れた新型コロナウイルスは、中学生を含む多くの方々の大切な時間や生活などに様々な影響を及ぼしました。健康、給食での会話、友達や家族の存在など、今まで当たり前に感じていたことが実はとても大切なことであったと気付かされたり、新たな発見をしたりしたことでしょう。新型コロナウイルスが感染症法上五類に位置付けられ、これまでの日常が少しずつ戻ってくると思われますが、数々の自粛や制限を強いられた子供たちにとって、辛い三年間だったと思います。

しかし、これからの人生では、こうした苦難を乗り越えながら身についた柔軟性や思考力が、たとえ壁にぶつかろうともくじけずに立ち向かう原動力になると信じています。

「わたしの主張大会」に作品を寄せてくれた中学生たちが、今ある自らの日常生活を見つめ、考えたことや気づいたことなどをもとに、社会を変えようと行動することが、沼津の未来を創り上げていきます。

様々な考えを持った人たちと話し合い協力しながら、自分らしさを発揮し、より良い社会に変えていこうという『貴き志』をぜひ持ち続けてください。

中学生がこの大会を通して自らの主張を多くの人に伝えることは、社会の一員としての自覚を高めるきっかけになることでしょう。また、多くの人が中学生ならではの視点と感性に基づく表現に接することで、彼らに対する理解を深め、「地域総がかり」で子供たちの成長を支えていただければ幸いです。

終わりに、大会の開催にあたり、ご協力をいただきました先生方や保護者をはじめとする関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

目次

○それって本当にエコなのか？それともただのエゴなのか？　第一中学校三年　木村莉緒（きむらりお）……1

○風が吹くその時のために　第二中学校三年　若林実和（わかばやしみわ）……2

○小さないいこと　第三中学校三年　村山百果菜（むらやまもかな）……4

○私と言葉　第四中学校三年　牛久和音（うしくおと）……5

○普通って何だろう　第五中学校三年　工藤智輝（くどうともき）……7

○SDGsのプロ ～Theじいさんズと私～　片浜中学校三年　杉山奈生（すぎやまなお）……8

○少しの「ありがとう」と「笑顔」をあなたに　金岡中学校三年　青木智子（あおきともこ）……10

○マナーの必要性　大岡中学校三年　中川璃子（なかがわりこ）……11

○「壁を破る」　静浦小中一貫学校九年　城野結月（しろのゆづき）……13

○挨拶の生み出す力　愛鷹中学校　三年　井深七瑚（いぶかなこ）……14
○中学校で変わった私　大平中学校　三年　田中明澄（たなかあすみ）……16
○過疎化から地域を救う取材　長井崎小中一貫学校　九年　大城柚稀（おおしろゆずき）……17
○自由に主張できる社会へ　原中学校　三年　村上レイラ（むらかみれいら）……19
○会話は気持ち　浮島中学校　三年　久保田葵（くぼたあおい）……20
○「好き」という気持ちが　門池中学校　三年　對馬里紗（つしまりさ）……22
○僕の信じる道　今沢中学校　三年　日吉優太（ひよしゆうた）……23
○現代を生きる私たちだから必要なこと　市立沼津高等学校中等部　三年　長野利菜（ながのりな）……25
○三重のおばあちゃん　戸田小中一貫学校　九年　小村剣太（こむらけんた）……26
○本当の多様性とは　加藤学園暁秀中学校　三年　南綾音（みなみあやね）……28

それって本当にエコなのか？
それともただのエゴなのか？

第一中学校　三年　木村　莉緒

春は出会いと別れの季節。その季節に欠かせない風物詩。桜。今年は例年より九日も早く、昨年に続き記録的な早さとのことです。調べてみると、一九八〇年代に比べ、開花も満開も一週間ほど早まっています。「異常気象」という言葉もよく聞きますが、もはやこれが日常になるのではと感じます。私はこのニュースを聞きながら、気候変動が更に急速に進んでいくのではと不安になると同時に、何か対策はされているのだろうかと疑問に思いました。

ちょうどその頃、私たち家族は父の車の乗り換えでカーディーラーに出かけました。父は欧米が今後はガソリン車をやめ、電気自動車・EVになるという報道を見てEVへの乗り換えを検討していました。担当の方から

「この車はゼロエミッションで走行時にCO_2等のガスを出さないのでエコですよ。」

という説明を受け、買い換える気満々でした。「ガソリンも使わずCO_2も排出しないなんてすごい！」。SDGs目標の「気候変動に具体的な対策を」と「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」の両方に貢献できる！と家族みんなが乗り気でした。しかし、家に帰ってある疑問が沸きました。それは、EVを動かす電力はどのように発電しているのか？発電に化石燃料を使っているとしたら本当の意味でCO_2削減や、真の温暖化対策にはならないのでは、という疑問です。詳しく調べてみたところ、日本の化石燃料による火力発電の割合は、七一・七％。一方EV化を進めるヨーロッパは化石燃料の割合を再生エネルギーが上回っている状況でした。ヨーロッパのように電気の元もクリーンエネルギーになればエコですが、日本のように化石燃料発電の割合が高い国でEVに乗ったとしても、CO_2削減にはあまり貢献しないのではという疑問が残りました。

また、EVに必要なバッテリーにはリチウムが大量に使われますが、現在のリチウムの生産方式には、水不足や水質・土壌汚染などの環境問題があることを知りました。主要採掘国のチリでは、採掘のため大量の地下水を汲み上げ、水資源が枯渇し奪い合う紛争が起きているという課題もあります。リチウムはレアメタルであり持続可能な資源ではありません。日本や欧米諸国はEV化を進めることでSDGs目標を達成できるかもしれません。しかし、それが他の国の負担や犠牲の上に成り立っているとしたら…。それは本当の意味でのSDGsと言えないのではないでしょうか。こうした事実を踏まえ、父のEV購入は現時点で見送り様子をみることになりました。

EV以外にも太陽光発電に関連する産廃・森林伐採問題、ペーパーレス推進の裏でサーバーを維持するため大量に電気を消費する問題、レジ袋有料化やペットボトル削減を商機と見て作られたエコバックや水筒が、大量に家庭で余っている問題等々、私には気になることがたくさんあります。それって本当にエコなのか、エコに便乗した商売や誰かの負担や犠牲の上に成り立っている人間のエゴではないのか？と考えてしまうのです。

では、経済発展を捨てればエコなのかというとそれも違うと思っています。

EV普及をきっかけにエネルギーのあらゆる領域での脱炭素化の研究が加速しています。「技術革新による経済的豊かさ」と「誰も負担や犠牲を強いられない平等社会」の両立、これこそが皆が目指すべき姿で、それを実現する知恵が人にはあると私は信じています。また、報道や声が大きい人の考えが必ずしも正解とは言えません。そのため常にその背景に目を向け、自分で冷静に考え判断する力を養うことが大切です。だから私たちは学んでいるのではないでしょうか。学校の仲間や先生との対話、そして、受け身でなく自分自身が調べ、情報を取りにいく力を身につける努力が、今後はより一層大切になってくると感じます。

それって本当にエコなのか、それとも人のエゴなのか、私は今後も常に自分自身の中で問い続けていきたいです。

風が吹くその時のために

第二中学校 三年 若林 実和

「一歩は小さくても良いんだな。」

仲間と一つ一つ準備を重ねて迎えた図書委員会の企画。無事に終えたその日、私はいつになく清々しい気持ちになっていました。

この体験をする前、私は物事を「引き算」で考える傾向がありました。計画をしていたことの中で、できなかったことや終わらなかったことにばかり自分の意識を向けてしまい、必要以上に焦っていました。しかし、委員会での活動がこれまでの私に変化を生みました。自分の小さな経験は多くのことと繋がっていることに気づき、小さなことでも一つ一つプラスの「足し算」で考えていくことの意味や大切さを実感しました。

中学校二年生の時、私は本の面白さをみんなに紹介したいという思いで、図書委員になりました。その時、図書館を利用する人が限られているという課題を仲間と話し合う中、私は小学生の頃、初めてビブリオバトルに参加したときの感動を思い出しました。本を紹介する楽しさ、他の人が紹介した本を自分も手にとって読みたくなったこと。その経験は、まるで自分に「本の風」が吹いて来るようでした。

本を読み、紹介し合う楽しさを共有できたらという思いで、ビブリオバトルのような会のイメージを提案し、「ビブリオライブ」という企画名で行うことになりました。仲間との話し合いを重ねる中で「昔、つらい生活だった

時に、描いた漫画をトイレに貼って、みんなの心を明るくしていた人がいたんだよね」という話から、誰でも必ず目につく場所として、トイレにポスターを貼ることにし、一定期間貼られるポスターを何度見ても新鮮に感じるよう、言葉やデザインを変え、何種類も作りました。全ての教室とトイレに、貼る場所や高さ、ポスターの大きさにもこだわって、とにかく思いついた工夫を全て行い、準備は順調でした。

しかし、当日が近づいてきてもなかなか出場者が全ての日程で集まりません。出場者が揃わないなら一日目は中止にしたほうが良いという意見も出ましたが、図書委員も出場して四日間行うことにしました。

一人か二人でも聞きに来てくれたら嬉しい、という思いで迎えた一日目。開始予定時刻を過ぎても人が来ません。焦った先輩が「誰か呼んでくる！」と教室へ走りました。聞く人がほとんどいないのに始めても良いのだろうか、と後輩一同は迷いましたが、「とにかく始めてみよう！」と会は始まりました。

先輩の呼び込みもあり、だんだんと人が増え、私達は一日目を何とか終えられたことに安心しました。初日に出た改善点を活かして迎えた二日目は初日に来た人達が友達を呼んで集まり、少しずつ運営に慣れてきた三日目は、発表する人が仲間を呼び、それを聞いた人まで集まり、過去三日間で一番多く人が来てくれました。最終日の四日目。これまでで一番多くの人が来てくれたわけではありませんでしたが、何回も足を運んでくれた人も含め、たくさんの人が集まってくれました。

四日間の企画は、こうして終わりました。準備は計画的に行え、満足できるものでした。図書館にこれまでとは違う「風」を呼び込めたように感じられたからです。振り返ると、この企画は、小学生の頃のあの感動がきっかけでした。委員会の仲間一人一人のひらめきと、迷っていた時の、「やろう」と踏み出した一歩。先輩が人を呼びに走ったあの瞬間。一つ一つを積み重ねていたことが新たな風を呼びました。全ては「足し算」の上にあったのだ、と感じました。百パーセントを目指し、だめなら諦めることが最善だろうと「引き算」で物事を考えていた私は、プラスを重ねる「足し算」で考えるようになりました。

このことは、今後社会の課題に向き合う姿勢として大切なことではないかと気づきました。紛争の解決や地球温暖化への対応など、社会の課題にも一つ一つ積み重なった原因があると思います。それらを解決していくためには、ゼロより一、一より二、とゴールまでの過程を地道に取り組む必要があり、私自身にも言えることでした。

私は、「風が吹く時」という言葉とある本の中で出会いました。

「風が吹く時がある。君も風を待て。……準備をしながら、その時を待てばいい。風は見えないから感じ取るしかないんだが、いつか必ず吹く。君自身の中にある最善を捜す力が風を呼ぶんだ。」

「風が吹く時」とは、自分が進む道がはっきりと分かる瞬間のこと。いつかきっと私にもその時が来ると信じています。だから今、私は小さなことを大切にし、一つ一つ「足し算」していきたいです。風が吹くその時のために。

『君が残した贈り物』藤本ひとみ

小さないいこと

第三中学校　三年　村山　百果菜

「いいことをすると自分が幸せになる。」

私は中学生になって、そのことに気がついた。

私は今まであまり人を気遣うことができなかった。どちらかというと、誰かが困っているのを見ても勇気が出ず、手を差し伸べようとすることができなかったのだ。けれども中学校生活を通して、そんな私の考えが変わっていった。

中学一年生のはじめの頃、部活動で先輩・後輩という立場が初めてでき、何から始めていいのかがわからなくて困っていると、当時の二年生の一人の先輩が私にこう話しかけてくれた。

「先輩がやっているコートのブラシがけを代わってくれる？」

と。私はその先輩にお願いされ、

「はい！」

と元気よく返事をしたものの、内心なぜかムッとしていた。その先輩は、一年生がやるべき仕事を優しく教えてくれただけなのに、私は、（これから先輩に色々と気を遣わなければいけないんだな。）というマイナス思考の捉え方をしてしまった。けれども、ブラシがけをやり終えた時、私と交代した先輩がとびきりの笑顔で

「ありがとう！」

と言ってくれたので、私は、とても嬉しい気持ちでいっぱいになった。だが同時に、当然のことを教えてくれた先輩に対し、ついムッとしてしまった自分が恥ずかしく思えた。

私たちは、生活する中で、（こんな面倒くさいことやりたくない。）、（どうして自分ばっかり、大変なことをやらなければならないの？）と思ってしまうことがたくさんある。

しかし、今回のことで、そのような捉え方は間違っていると気づいた。すべては、自分のためにしていることで、そう思えば、嫌なことや面倒くさいことも、案外気持ちよくできるかもしれないと思えるようになったからだ。

それからというもの、部活動では先輩たちが良い環境でテニスを行えるように、ブラシがけやボール運びなどを率先して行うようになった。今思えば、良いことをした後の清々しい気持ちや、喜びが私に変化を与えてくれたのかもしれない。

それから、二年生になり、生徒会に立候補する友達の名前を毛筆で書いてほしいという依頼を受けた。自分ではそんなに良いことをしたという実感はなかったが、依頼してきた友達が、

「ありがとう。本当にありがとう！」

と、想像以上に喜んでくれたのを見て、私も嬉しくなってしまった。こんなに些細なことで互いが幸せな気持ちになれるなんて、なんて素敵なことだろう。「幸せの種」は自分たちの身の回りにあふれていて、普段、気づいていないだけなのかもしれないと思った。

また、最近は勉強の不安や将来の悩みなどを感じることが多くなり、そ

のことを父と話していると、
「いいことをすると、いい人生を送れるよ。」
と言われた。いつもは父の言うことをあまり気にもとめない私だったが、その言葉はやけにストンと心に入ってきた。学校生活の中で、「いいことをすると絶対にいいことが返ってきて、自分が幸せになれる」ということを、自分自身が感じ始めていたからかもしれない。
私は、「幸せの種」を発芽させるための秘訣に気づくことができた。それは、決して難しいことではない。ただ、思いやりを持って行動するだけのことなのだ。「大丈夫？」、「ありがとう」、「頑張ろう」、そんな些細な声掛けをするだけで、言われた側も言った側も、とても温かい気持ちになれる。
誰かが笑顔になる。そのスタートラインは「小さないいこと」から始まるのだ。

私と言葉

第四中学校 三年 牛久 和音

今、私は上手に話せていますか。
私には小さいときから吃音があります。ものごころついたときには、
「なんか話しにくい。自分はおかしいのかな、何かの病気なのだろうか。」
と感じることが多くなってきました。保育園では、気にせず話していましたが、小学校に入学すると、新しい友達、新しい環境のせいか、自分の話し方が気になり、友達の視線が怖くなりました。国語の授業で音読する時。すらすら読んでいく友人の声を聞きながら、どきどきしながら自分の番を待ちます。緊張のピークの中、いよいよ自分の番が回ってきます。そしてやっぱり、わたしはすらすら読めず、つっかかってしまうのでした。どうにか読み終わったあとの友人の視線が本当におそろしくてたまりませんでした。
幼い子どもは残酷です。
「和音ちゃんの話し方、変だね。」
といわれたり、話し方をまねされたり、はやし立てる子もいました。確かに私の話し方は、理解されにくい部分もあったでしょう。そんなとき、私は、気にしないふりをして、そのことを考えないようにしていました。けれど、やはり、なんでそんなことを言うのかと頭の中でぐるぐると繰り返し、どうしようもなく悲しくなりました。
学年が上がるにつれ、周囲の級友たちもいろいろなことを理解できるようになりました。それと同時に私の話し方について理解してくれる友達も

増えていきました。しかし、それはわたしにとって怖いことでもありました。なぜなら、理解されると言うことは、私の話し方に注目されると言うことだからです。四・五年生あたりが吃音のピークでした。授業中の音読では相変わらず声が出ません。先生の指名で発言する際はものすごく緊張し、手に汗をかきながら言葉を発せないまま、気まずい沈黙がしばしば訪れました。

その日も、朝の会のスピーチでいつも通りなかなか言葉が出ず困っていました。そのとき後ろにいた五人の友達が一緒になって原稿を読んでくれました。五年生の時、調べ学習ではポスターを作り、発表し感想を言い合う時間がありました。案の定、私の話し方について質問してくる子がいました。自分自身、話し方は気になっていましたし、誰かに「その話し方は何？」と聞かれることを覚悟していました。ところが、その直後、別の友人が「まあまあ、しょうがないよね。」とカバーする感じで優しく言いました。まさか、そのような言葉をもらえるとは思っていませんでした。焦っていた私はその一言で落ち着きをとりもどし、心底うれしくなりました。

私の吃音は、ひどいときと、そうでもないときの差が激しいのですが、学年も上がるにつれ、少しずつ少なくなっていると感じます。中学に入学してある日の授業中。数学の問題を順番に発表することになりました。なぜかそのとき、すんなりと発言していたのです。その瞬間、五年生の時、声をかけてくれた友達に「なんか、成長したね。」と言われました。ふいに言われて「ありがとう」としか返せませんでしたが、友達にも私の成長を理解してもらえたのだと思うとすごくうれしくなりました。

小学校の頃は、人前にでること、積極的に何かに参加することがとても苦手でした。吃音を気にして、あと一歩が踏み出せない状態でした。しかし、今では合唱の指揮者に挑戦したり、学級三役にも挑戦しています。人前で話すことは人並み以上に増えました。まだ、気になる部分もありますが、友達とたくさん話して毎日が本当に楽しく笑顔で生活できています。こんなに楽しく生活を送れるようになったのは、私の周りで多くの友人が支えてくれたお陰です。友達との関わりの中で私は常に挑戦する気持ちを持つことができました。

そして、中学校三年生になりました。小学校から九年間一緒だった仲間ともお別れになります。いよいよ受験という壁にぶつかります。みんなたくさん悩むと思います。私はたくさん仲間に助けられてきました。今度は困っている友人に積極的に声をかける人間でいたいと思います。毎日少しずつでも挑戦する気持ちさえ失わなければ、人は必ず変われるはずです。

今、私は上手に話せていますか。

普通って何だろう

第五中学校　三年　工藤　智輝

『異常』…みなさんはこの言葉を聞くと、どんな印象を受けますか？この言葉の意味を辞書で調べると「普通と違っていること」と書いてありました。では、『普通』とは何でしょうか？一般的に普通とは、多数派のことを指します。辞書には「ありふれたもの、他と異なる性質を持っていないこと」と書いてありました。今の社会に置きかえて考えてみると、集団の中で皆と合わないものが異常と見なされ、多数派と区別されているように思えます。そして、その異常とされたものに対しては、避けるべきもの・同情すべきものという見方をされがちです。しかし、その見方は本当に正しいのでしょうか。普通かどうかの基準は一人一人が各々持っているものであり、何が普通で何が異常なのか、一概に言ってはいけないものだと私は思うのです。お互いの普通を理解し合い、受け入れ合うことが大切なのだと思います。

なぜ私がこのように考えるのかというと、数が多いというだけの普通の人が、知らず知らずのうちに「普通でない人」を傷つけていると感じたからです。例えば、私は水泳をやっていて、バタフライを泳ぐことができます。このことを学校の人に言うと「すごい」と言われることがあります。しかし、私はバスケットボールなど陸上での運動があまり得意ではありません。それに対し、「ドリブルくらい普通できるでしょ。」と言われたら、どう思うでしょう。「普通」と比べて劣っていることに対し、周りの人にからかわれたり、避けられたりしたら傷付きます。だから、自分の「普通」を人におしつけるのは間違っていると思います。

私は日常的にいわゆる『障がい』を持った人と関わっているのですが、その中で時々心の中から怒りが込み上げて来るようなときがあります。それは障がいを持っている人に対してうまれるのではなく、その人に対する周りの対応に対してうまれるものです。先日、プールに泳ぎに行った際に、たまたま障がいを持った『彼』に会ったので一緒に泳ぐことになりました。彼が泳ぎ始めたころ、私は祖父と同じ年代くらいの男性に突然声をかけられました。何を話すのかと思ったら、その男性は私になんと、泳いでいる彼のことを指して、

「あの人は障がい者だから、近付かない方が良いよ。」

と言ったのです。この男性は悪意を持って言ったのではないのでしょうが、私は激しい怒りを感じ、社会の障がいのある人に対する考え方に失望しました。見た目が違う、障がいがあると分かっているのであれば、むしろ相手が困らないよう近付いて手助けするものだと思っていたからです。障がい者を区別し、受け入れず、避けるようなことは、「普通」でない人を排除することと同じです。それは絶対にあってはならないことだと思います。

元パラスイマーで、社会の『障がいの壁』を感じていた一ノ瀬メイさんは、

「社会が障がい者をつくりだすなら、その社会が障がい者をなくすことだって、できるにちがいない。」

と言っており、私はこの言葉に胸を打たれました。

著しく情報化が進む現在、偏った情報やウワサ話などを鵜呑みにし、そ

の声が大きくなることで「普通」が造りあげられてしまうことが多くあるように思います。これを防ぐためにも、目や耳から得た情報だけにとらわれず、想像力を磨いていくことが重要です。自分の「普通」が相手の「普通」と異なるとき。健常者が障がい者と出会ったとき。非難したり排除したりするのは悲しみの連鎖を生むだけです。

今の社会から「普通」がなくなれば、障がいを持つ人も、生きづらさを抱えている人も、誰もがすごしやすくなると思います。人と人とが違いを受け入れ合うことが当たり前とされる社会になるために、自分の中の普通をなくしてみませんか？一人一人の意識が変わればこの世界はもっと素晴らしく、生きやすい社会になると私は信じています。

SDGsのプロ ～Theじいさんズと私～

片浜中学校 三年 杉山 奈生

二〇〇九年、杉山奈生は生まれました。

今日本は高齢化社会が問題になっています。そこで高齢化社会について調べてみました。一九七〇年に高齢化社会に突入し、二〇〇七年には超老齢化社会となりました。二〇二五年にはなんと全体の三〇％が高齢者になるそうです。つまり、私が生まれたときには、高齢化社会になっていたのです。

小学校のときに通学路を見守ってくれるのもお年寄りで、元気なお年寄りが身近にいるのが当たり前の環境で育ってきました。父と高齢化について話したり、ニュース見たりすると「若い世代が少なくて大変だ」とよく耳にします。そこで私は、「お年寄りの面倒を若い世代が見なければならないという義務感」「お年寄りは何もできないと勝手に解釈してしまうこと」が「大変」なのではないかと思いました。

「ただいま」「おかえり」私が家に帰ってくると祖父や祖父の仲間達の声が返ってきます。私の祖父は七十五歳です。今も自動車の整備会社を経営しています。会社と言っても、祖父と祖父とほぼ同い年のおじさん二人で整備の仕事をしています。祖父の事務所には何十年も付き合いのある仲間たちが集まってきます。私は、祖父とその仲間たちと小さい頃から一緒にたくさん行動してきました。祖父とその仲間達の行動力のすごさには、今でも

驚かされます。

祖父の一日は、朝、事務所の清掃をしてコーヒーを入れることから始まります。そして仲間達がコーヒーを飲みに現れます。祖父いわく「安否確認」だそうです。そして、車検や整備の仕事をしながら、畑仕事をしていた仲間の一人が体調を崩したと連絡があれば病院に連れて行くなど、仕事以外のこともみんなで連絡を取り合い助けあっている様子を見ます。

私は幼い頃から、畑や山に行ったり、毎年恒例行事である初詣や花火大会、りんご狩りなどに祖父とその仲間たちと一緒に出かけました。年齢を重ねても、自分自身の病気や家族の介護なども仲間達で分かち合い、助け合いながら前向きに楽しんでいる姿を見ていると本当に素敵な関係だなと思います。私の周りにいるお年寄りは、若い世代に頼ろうとはしていないのです。

高齢化社会の「大変さ」を感じてしまうのは、お年寄りとコミュニケーションをとる機会が少なく、お年寄りとコミュニケーションをとったことがないことが原因なのだと思います。彼らは年齢を重ねているからこそ、私達の知らない経験をし、物がない貧しい時代を知っているので、私達が学べることもたくさんあると思います。だから、物を大切にすること、活用すること、今あるものを工夫することもできて、色々なものを再利用して使う知恵も持っています。つまり生まれながらのSDGsのプロです。

もちろん世の中には仕事をしたくても身体がうまく動かない、親しい人が周りにいなくて孤独を感じている、そんなお年寄りもいると思います。全てのお年寄りが明るく楽しく過ごしていくためにはどうしたらいいのか。みなさんはどう考えますか。私は子供からお年寄りまでどんな人でも気軽に溶け込める温かいコミュニティを作っていくといいと思いました。普段から世代を超えた交流があれば、何か問題が起きたときでも自然と周りに声をかけたり助け合ったりすることができるはずです。

私たち片浜中学校は、ボランティア活動、古紙回収、コミュニティスクールを生かした片浜地区での職場体験や保育体験を行っています。若い世代が積極的に地域やお年寄りと関わることで、新たなコミュニティが生まれていき、広がっていくと思います。

これからの社会を築いていくのは、私たちです。私たち若い世代が地域のコミュニティを大切にし、お年寄りたちの経験や知識を引き継いでいきましょう。「高齢化社会」を問題とするのではなく、自分ごととして、良い方向に捉え、生かしていけるのではないかと思います。私はこれからSDGs のプロであるじいさんズとコミュニケーションを続け、明るく温かい地域を築いていけるようにしたいです。

少しの「ありがとう」と「笑顔」をあなたに

金岡中学校　三年　青木　智子

先日、家族とテレビを見ていると「乗れないエレベーター」という特集が行われていた。それは、ベビーカーや車椅子を使用する人たちが、元々エレベーターに乗っている人たちに降りたり詰めたりしてもらうことができず、数分、時には数十分待たなければいけないことがあるという話だった。

私がその特集の中で一番驚いたのは、目が合って気が付いたのに気まずそうに目線を下げ、そのまま乗っている人がいるということだ。気まずいと感じるのなら譲れば良いし、そのまま乗るなら堂々としていれば良いのにと思った。

正直、私は気がついたら譲ることが当たり前だと思っていたので、「乗れないエレベーター」という問題が起きていることがショックだった。そこで、乗れない側の意見だけでなく、乗っている側の意見も気になった。調べてみると、なるほど、確かに、と思うことが見つかった。

例えば、「何も言わない」＝「不自由していない」という考え方。確かに、乗ろうとしている人が何も言わないと、「次のエレベーターで行けば良いと考えているのかな」と思うかもしれない。他にも、自分も用事がある、そもそも気がつかない、一回譲ったことがあるが当たり前のように乗られたことが嫌だった、勇気が出なかった、と乗っている側にも様々な考えがあることがわかった。

しかし、私はそのような考えに賛成できない。なぜなら、その考えは全てわがままだと思うからだ。ベビーカーや車椅子を使っている時点で私たちより身軽なわけがないし、動きづらいことは明らかだ。また、身軽でないということに関して負い目や申し訳無さを感じ、譲ってほしいと言えない人も少なくないはずだ。「困っているのだったら言えばいい」「私から気づく必要はない」という考え方がより言いだしにくい状況を作り出していると思う。

しかし、譲ったときに感謝されなくて残念だと思う気持ちも、そこから勇気が出なくなってしまった気持ちもわかる。なぜなら、私が実際に体験したことがあるからだ。

ある日の登校中、ゴミ袋を両手に抱えたおじいさんが坂を登っていた。私が

「持ちましょうか？」

と言うと、

「大丈夫です。」

と返された。私にとってはかなり勇気を出して声をかけたので、一言で返されたのは少し悲しかった。母に励まされたが、重そうな荷物を持った人に会うと、一歩が踏み出せない自分がいる。だから、勇気が出ない人の気持ちもわかるのだ。

しかし、よく考えてみると、私は悲しいと思っていいほど相手のことを気遣えていただろうか。あのとき、私が

「通学路でゴミ集積所の前を通るので持たせてください！」

と笑顔で言えば、おじいさんが頼みやすかったかも知れない。「助けること」

に固執してしまい、相手のことをよく考えず、言葉だけの気遣いだったのではないか。

ただ、もしおじいさんに「ありがとう。」と言われていたら、自分の行為が迷惑ではなかったと感じることができたとも思う。

助けることも助けられることも難しいと感じた出来事だった。

人はお互いがお互いの肩を少しずつ借りて生きている。だから、助けることも助けられることも特別だと思わなくて良いと思う。でも、感謝されて嬉しくない人はいないだろう。だから、そこに少しの「ありがとう」と「笑顔」があれば、お互いにもっと気持ちよく助けたり、助けられたりすることができるのではないか。

英語の表現で「他人の靴を履いてみること」という言い回しがある。相手の立場に立ってみるという意味だ。ヒールを履かない人はつま先やふくらはぎが痛くなることを知らないだろう。でも、履くことで辛さを体験できる。次から労ろうと思うことができる。

実際に履くことはできなくても、想像することで、私たちは変われると思う。

エレベーターを降りてくれた人に、相手の気持ちを想像して「ありがとう」を言えば、「また譲ろう」「譲ってよかった」と思ってもらえるかもしれない。相手の気持ちを想像することで、「ありがとう」や「笑顔」を言いやすくなると思う。

だから私は、相手のことを想像し、「少しの『ありがとう』と『笑顔』」を大事にしていきたい。

マナーの必要性

大岡中学校 三年 中川 璃子

みなさん、マナーとは、なんだと思いますか？

先日、私は昼ごはんを食べに行こうと、父と一緒にレストランへ行きました。レストランについたのは、遅めの十三時だったため、近くの学校の生徒がたくさん居ました。（学校終わりかな？）そう考えながら注文したご飯を待っていました。

その時、いきなり私の席の近くで、大きな悲鳴が上がりました。突然、鳴り響いた悲鳴に、ぼーっとしていた私は、とてもびっくりしました。

悲鳴が上がった席を見てみると、そこには高校生が二人、大笑いしながら座っていました。高校生は周りが、ざわついたのに気づいて、ヘラヘラしながら「すみません」と、周りの人に謝っていました。

私と父は、顔を見合わせて、「なんかすごいね」と言いながら、その時は、その場を過ごしました。

レストランの帰り、父と車の中で今日の高校生のことについて話しました。父は

「楽しいのは、わかるけど、ここはご飯を食べに来るところだから、周りを配慮したマナーをきちんと守ってほしいものだな。」

と言いました。私は父の言葉に共感を覚えました。

人生の中で一番楽しいと言っても過言ではない高校生。明るく人生を楽

しむ姿は、私にとって憧れです。それと同時に高校生は大人になる節目の時期だと私は思います。大人になるために色々学んでいる高校生が、マナーを怠って良いのでしょうか。

どんな場であっても、高校生でなくても、マナーは必要です。例えば、お葬式。お葬式とは、死者を祀る、大切な儀式です。そんな儀式中にぺちゃくちゃ話をしていたらどうでしょう。誰だって、その光景を見かけたら、すぐに「常識がない」と思うでしょう。大切な人を亡くした遺族、死者に失礼だと感じてしまいます。マナーを守っていないと、「常識がない」などと思われ、その人の「イメージが下がる」など悪いことだらけなのです。しかも、その代償は、自分だけではありません。騒いでしまったその場所。お店などだったら、そのお店の評価なども下がり、人気がなくなってしまいます。最近のニュースで重なるのは、「某寿司屋の事件」です。一人の男性がみんなの食べる寿司や醤油などを舐める動画などがネットに上がり、そのお店は営業妨害を受けました。

このように、自分だけでなく、色んな所で、一度犯してしまった事も、負の連鎖として続いてしまうのです。

皆さんにとってマナーとはなんだと思いますか？もしかしたら「マナー」に対して、面倒くさい、難しいと感じている人も中にはいるかもしれません。だけど、よく考えてほしいです。このマナーというのは、私達を守ってくれる規則だとも言えます。つまり、生活していくのに必要な「社会のルール」です。この街も、「社会のルール」をみんなが守っているからこそ、安全に過ごせているんだと思います。

自分だけ、今だけ、一回だけといった甘い考えで、みんなが作りあげてきたマナーを壊してはいけないと私は思います。

「壁を破る」

静浦小中一貫学校　九年　城野　結月

「迷うことはいいことだ。たくさん迷ってあなたの答えを導き出せばいい。でも、長い間悩んでばかりいると相手も困ってしまう。だから思い切って決断することも大切だ。」

「優柔不断だね」と友だちに言われてショックを受けていた私に、フィリピンの英会話の先生が、はっきりとこう伝えてくれた。

私たち日本人は相手のことを思うあまり、自分の意見を濁し、ただ共感するだけの人が多い傾向にあるように思う。だから、その先生の話は素直に自分の心に刺さった。それがまたすごく新鮮で、どこか心地よさを感じた。英語を学んでいたことで生まれた、何気ないやり取りの中から大切なことに気づくことができた。「英語なら自分の気持ちを素直に言い合えて、受け止めることもできる。」これが私が英語を学ぶ必要性があると思うきっかけとなる出来事であった。この他にも、英会話を通して異国の文化や魅力について知ったときはとても興味深く、楽しかった。こうして考えると、英語を学ぶ必要性はたくさんあると思う。

皆さんは対話型ＡＩツール「チャットＧＰＴ」を知っているだろうか。チャットＧＰＴの魅力は多言語に対応しており、不自然な文章表現がなく、より精度の高いやりとりができるところだ。便利な機能を使い慣れていた私は、今まで必死に覚えた英単語や文法が思い出せなかった経験がある。あるデータでは読解力をはじめとした思考力が日本人は年々低下してきていることがわかった。だから私たちは日々、思考力や判断力などの能力を高めるために努力を続けることが大切だと思う。

昨年、沼津市の全中学校でパフォーマンステストが行われた。私はスリランカ出身のＡＬＴの先生と交流した。これまでフィリピンの先生としか会話したことがなかったが、この交流を通してスリランカの文化や魅力について触れることができた。ただ一方的に知るだけではなく、私も沼津の観光地である「びゅうお」や「沼津港」の魅力を発信した。すると、今度来日した際には、沼津も訪れてみたいと話してくれた。私が紹介したことに対して、反応や興味を示してくれたことがとても嬉しく、楽しい時間となった。また、機械に頼らず、自分の力だけで外国の方と会話が成立したことは自信にもつながった。

世界のグローバル化が進む現代では、多くの企業が日本国内だけでなく海外に市場を広げており、英語スキルがある人材への需要が高まっている。自らの意思や意見を物怖じせずに発信する主体性や積極性は大切であり、日本人に特に求められる資質である。日本人に備わっているとされる使命感や責任感に加え、英語スキルを身につけて自信をもって話すことができれば、心の豊かさにもつながる。

そして便利な機械に頼らず、英語を必死で学び、相手の顔を見て話したほうが、国を越えて、「心と心」の通じ合いもできると思う。スマートフォンを使って成り立つ会話は、言葉は通じたとしても本当の意味での通じ合いにはならないと思う。最初はうまく話せなかった英語が、努力して話せるよ

うになって、相手と初めてわかりあえたときのあの心地よさは何物にも代えがたい物であり、今でも忘れられない。それはわたしたち人間だけにしか体感できないことだ。

私たちが自分の国以外の人たちと交流するとき、そこには必ず「言葉の壁」が立ちはだかる。自分の話したことが伝わらず、相手の話したことを理解することができずに、関わることを諦めてしまえば、いつになっても「言葉の壁」を越えることはできない。だから英語を学びいろいろな国の人と話し合い、関わり合い、つながり合うことで相手との間にできてしまう言葉の壁を破っていくことが大切だと思う。そのために私はこれからさらに英語を学んで世界中の人と関わっていきたい。国境や言語の壁をこえて、いつか世界中の人々が笑い合えるような世界になることを、私は願う。

挨拶の生み出す力

愛鷹中学校 三年 井深 七瑚

「おはよう。」「ありがとう。」「ごめんなさい。」私たちは日々、あらゆる場面で「挨拶」を使っています。私も、毎日仲のよい友人や家族には、朝は「おはよう。」、何かをしてもらったら、「ありがとう。」と、挨拶をしています。でも、目上の方に対してはどうでしょうか。みなさんは、近所の方や先生方などの目上の方に、自分から挨拶することはできますか？私は自分から挨拶をすることが苦手です。その理由は単純に、恥ずかしいからです。しかし私のその考え方は、ある日の友人の行動がきっかけとなり変わったのです。その日私は、一人の友人と一緒にお店でご飯を食べに行きました。食べ終わってお会計をし、お店から出ようとした時、その友人が、

「とてもおいしかったです。ありがとうございました。」

と店員さんに伝えていたのです。私はその姿を見て、心からすごいと思いました。この行動を、「当たり前」と感じる人も多いと思います。しかし、目上の人と話す勇気が出ず、上手に言葉にすることができない私にとって、その友人はまぶしく、キラキラして見えました。その後友人に

「しっかりと感謝が言えるなんてすごいね。」

と言うと友人は、

「感謝を伝えることで、私もお店の人もお互いにうれしい気持ちになるから、感謝の気持ちはしっかり言葉で伝えるようにしているんだ。」

と話しました。

友人のこの言葉から、私は日常で毎日使う「挨拶」について考えるようになりました。そこで私が一番初めに考えたことは、「私にとって挨拶とは何か」です。私自身、挨拶が生み出すメリットが分かっていません。そこで私は挨拶とは何か、改めて調べてみました。「挨拶とは、自分の心を開き、相手の心に迫る。」という意味があるそうです。これを踏まえて、挨拶のメリットについて考えてみると、同級生と朝「おはよう」と何気なく言ったとき、近所の人に「行ってらっしゃい」と言われたとき、私は嬉しくなる、ということに気がつきました。今までの私は挨拶に対し、「恥ずかしい」「無視されたらどうしよう」とネガティブに考えていました。しかし思い返してみると、今までに挨拶をされて嫌な気持ちになったことはありません。むしろ私は、相手に存在を認められたように感じ、嬉しくなります。きっとみなさんもそう感じるのではないでしょうか。

このように、挨拶の意味をとらえることで挨拶に対する考え方が変わったのです。さらに私は、挨拶をした後のことを想像してみました。

日常を思い返した時、私たちは挨拶をした後どんなことを話しますか？私だったら「昨日のテレビ見た？」「宿題のワークわかんなかった。」など何気ない会話をします。ここから考えられるのは、挨拶とは、コミュニケーションの入り口であり、もっと仲良くなりたい人と話すきっかけになるということです。さらには、この先の受験や就職などの面接をする機会において、相手にとって気持ちの良い挨拶をしたらどうでしょうか。面接官へ好印象を与えるだけでなく、自分自身の緊張も和らげることが、できると思います。

こうして考えてみると、私たちが挨拶をして損をすることはないのです。「恥ずかしい」とか、「無視をされたら・・・・・。」とか、思ってしまうかもしれませんが、その気持ちを乗り越えて挨拶をした後には、こんなにもよいことが待っているのです。

私たちが幼い時から「当たり前」として教えられてきた挨拶は、心地よい人間関係を築く鍵であると同時に、毎日の生活を充実させるための大切なきっかけでもあります。現在社会の中で失われつつある「あいさつの輪」を、より多くの人に繋げていくことが、大切なことではないのでしょうか。相手に挨拶をすることで毎日が笑顔溢れる素敵な一日を過ごすことができるはずです。私はこの先、挨拶の意味を噛み締め、私の何気ない笑顔の挨拶で、誰かを勇気づけることができる、そんな大人になっていきたいと思います。

中学校で変わった私

大平中学校 三年 田中 明澄

「学校ってすごい！」

少しネガティブな私でも友達と会って、笑顔になってしまう場所。ずっとは続かない、限られた時間だけの場所。学校生活を全力で楽しみ、時には勉強にも目を向け、委員会や係会では、自分たちで企画、運営していく、そんな毎日が当たり前に続くと思っていた。当たり前に学校生活を送り、当たり前に自然教室や修学旅行に行き、当たり前に、学校祭があることを想像していた。これからもずっとそんな毎日が続くと思っていた。

令和二年二月、新型コロナウイルス感染症のニュースが世界に広がった。外国では、ロックダウンが始まり、都市が閉鎖された。テレビの向こう側では、見たことのある国で、私の知らない世界の日常が始まっていた。

三月、学校が休校になった。テレビの先で見ていた世界が、私の住む街にまで影響を与え始めた。私達の学校生活は小学五年の終わりから、誰も想像したことのなかった日常に変わった。

「え？学校行かなくていいの？好きなことし放題じゃん！」

その時には、不謹慎な気持ちも湧き上がった。そんな生活が、何週間、何ヶ月か経ったころ、なんの変化もない、ありきたりな毎日にふと疑問を抱くようになった。

「日本はどうなってしまうのだろう」

そんな中、分散登校での通学が再開された。時間や活動の制限がある中での授業は不思議な感じがした。いつもの教室は半分空いて、静まり返っていた。

コロナ禍での生活にも少しずつ慣れたころ、私達は中学校に入学した。

「大きな行事は中止だろうな」

そう考えていた中で、自然教室の話題が上がった。コロナ前は、二泊三日で行われていた自然教室が内容はほとんど変えずに開催されることになった。感染予防対策をしながら、ウォークラリー、カレー作りなどを行った。その中で特に私が印象に残っているのは、キャンプファイヤーだった。昼に行うキャンプファイヤーは友達の表情もよく見え、久しぶりに笑顔の輪が広がった。

コロナ禍で、様々なことが中止になっている中、大平中学校では、生徒と先生が話し合い、形を変えながら、様々なことに挑戦してきた。

委員会活動では、自分達で企画した募金活動が行われた。初めて企画した活動は、計画通りに進められるのか、とても不安だった。そんな中、先輩や先生方と話し合いを繰り返していくうちに、少しずつ自信がついてきた。どうしたらみんなが興味を持ってくれるのか、どうしたら、活動を周知できるのかを工夫した。始めは小規模で行った活動も、たくさんの人達が加わり、大きな成果を上げることができた。

令和五年五月八日、長く続いた緊急事態宣言も終わりを迎えた。しかし、コロナウイルスが完全に消滅したわけではない。まだまだ不安を感じることもある。このような予測困難な社会で、私達は、目に見えないコロナウイル

スという敵を工夫し乗り越えてきた。私はこの三年間で、自分自身で考え、友達と助け合い、苦難を乗り越える力をこの大平中学校で学ぶことができた。私は過去の自分から変わることができたと思っている。なにより、「ネガティブ」だった私が「ポジティブ」な発表を今、この場ですることができている。「学校ってすごい！」

過疎化から地域を救う取材

長井崎小中一貫学校　九年　大城　柚稀

私は、『うらっち』の活動を始めてから文章を書くことがとても好きになりました。『うらっち』とは、内浦、西浦地区の子どもたちが、プロのクリエーターからそれぞれの専門的な講義を受け、自分の住む地域や町を取材して作る、地元情報誌のことです。私はこのプロジェクトに四年間参加し続けており、その根底には、地元愛を越えるほどの熱い思いがあります。その思いをお話しすると共に、まずは取材を通して得た内浦、西浦地区の実態と問題を紹介していきます。

過疎問題。あなたは知っていますか。人口の急激な減少により、地域住民の生活水準や生産機能が一定のレベルを維持できない状態が進行していることを「過疎化」といいます。日本では、国土の約六割がそれに該当します。人口流失が著しい内浦、西浦地区も例外ではなく、この地域では就ける仕事がないからと都市部へ出て行ってしまう人が多くいます。私が取材で訪れた地元の飲食店や観光施設で働いている人たちはとても温かく、人のつながりを大切にする精神が地域の根幹を支えていることが分かりました。都市部とはまた違ったその魅力に気づかず、この地域を離れてしまった人もいたのではないでしょうか。私はとても残念に思います。

少子化も過疎問題と深く関わっています。今年度、長井崎小中一貫学校に入学した一年生の数は七人。現在、全校で約一二〇名いる児童生徒は、

令和十年度には約六〇名に半減するとされています。このままでは近い将来地元から人や子どもが消えてしまいます。この状況をどうにかしたい。この地域を守るために、私ができることは何だろうか。私はずっと考えていました。そして、それは地域について詳しくなり、より多くの人に地元の魅力を発信していくことこそが、私にできることではないかと思いました。

『うらっち』では、地元で有名なお店や、地元のお祭りの特集、地元の特産であるみかん狩りについて書くなど、徹底的に地元密着を意識して記事を書きました。完成品を友人に読んでもらったとき、

「地元にはこんないいお店があるんだね。知らなかった！」

と言ってもらえました。長く住んでいても、まだ知らない魅力がたくさんあることを取材と友人の言葉を通して確信しました。また、取材を通してハローワークやワークショップの開催に着目し、内浦、西浦地区で開催すれば、子どもがお店や施設を訪れる職業体験につながり、地域にはどんなお店や仕事があるのかを知ってもらう機会になると思いました。私の父のような漁師や、農家の方から仕事についてお話をしていただいて、見学した子どもたちが知識を広めることで、両者のインプットとアウトプットが成立するのも利点です。実際に働いている人も仕事の魅力や改善点を再認識できると思います。天城地区の「にじの子タウン」というイベントでは、旧校舎を活用し、さまざまな仕事を子どもたちが体験でき、これも地元活性化のヒントになると考えました。これらの活動を実践し、成功すれば地域の印象がより良くなるはずです。

『うらっち』の文章を考えているときに編集部の方にこう尋ねられました。

「この活動のやりがいって何？」

私はそのとき、『うらっち』を通して、いつか多くの人が内浦、西浦地区で就職をして住み続けるきっかけを作ることだと思いました。人口が増え、幅広い世代の人たちがこの地域で豊かな暮らしを送る。そうなれば、今よりももっとやりがいを実感できると思います。

これからも編集リーダーとして、地元に住んでいる一人として、地域を知り発信することで、地域の問題を改善する第一歩としていきたいと思います。

自由に主張できる社会へ

原中学校　三年　村上　レイラ

男は度胸、女は愛嬌。このことわざは、男は決断力が大切であり、女はかわいらしく愛想がよいことが大切だということわざです。男と女、日本では昔から性別というくくりでの言葉が多くあります。

皆さんはＬＧＢＴＱという言葉を知っていますか。ＬＧＢＴＱとは、レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー・クエスチョニングという言葉の頭文字をとったもので性的マイノリティの総称として使われています。近年の日本では、ＬＧＢＴＱという言葉を多く耳にします。かくいう私もこ数年でＬＧＢＴＱについて知るようになりました。性別のあり方は男や女だけではありません。自分の性をどのように認識しているかの性自認や俺・僕・私といった一人称などの性別に関する表現。つまり性とはグラデーションのように様々な要素が集まってできたものです。現在の日本には、約八・九％の性的マイノリティに属する人がいると言われています。三十人のクラスであれば、約三人が当てはまるということです。

性的マイノリティは見た目でわかるものではありません。私は一見、何の変哲もない「女子」に見えると思いますが、私は、性的マイノリティの一つであるＸジェンダーです。Ｘジェンダーには大きく分けて四つの種類があります。私はその中の一つの、時や場所、気分によって自分の性自認が変わる不定性です。私は昔から、男子のようにいたい日もあれば、女子のようにいたい日もありました。けれど、それを周りに主張することはしませんでした。なぜ、主張をしなかったのか、それは周りからの目が怖かったからです。可愛いものが好きだと女子の輪に入ろうとすれば、「意外だね。」と言われ、かっこいいものやヒーローが好きだと言えば、「女子なのに。」と言われ、自分自身を否定されたように感じる経験があります。それから私は、自分の性について主張をしなくなりました。

現在の日本には、ＬＧＢＴＱなどの性的マイノリティに関する主張をする人々が増えてきましたが、それでも尚、ＬＧＢＴＱに対する偏見の目は変わりません。学校によっては、「男のくせに・女のくせに」「気持ち悪い」などと言われ、いじめや差別が発生しています。また、今の社会では、同性愛やトランスジェンダーをネタにした冗談やからかいといったハラスメントが起きています。

一方で、ＬＧＢＴＱやＸジェンダーなどの性的マイノリティを受け入れていく姿勢ができつつあります。二〇一九年の調査で「ＬＧＢＴＱの人に対する差別、偏見がある。」と答えた人は、八七・八％でしたが、東京オリンピック・パラリンピック開催後の二〇二一年の調査では、七七・四％と、約一〇％も減少しています。同性結婚が認められた地域や、制服も男と女に関係なくスカートやズボンが選択できる学校など、少数派の人々を受け入れていく姿勢ができつつあります。

私達は、沢山の偏見を内に秘め、偏見に囲まれながら暮らしています。しかし、私たちが目指す社会は先入観・偏見で性別を判断することではなく、一人ひとりが性的マイノリティについて無関心でいることではなく、性別も

個性の一つであると考え、様々な形があると理解していくことです。一人ひとりが理解していく環境を作ることこそが、少数派の人々にとっての心の支えとなります。少数派の人々が立ち上がるためには、皆さんの考え方を変える必要があります。私は、私のように性別という壁に悩み、自分自身に殻を作って閉じこもるような、つらい経験をする人が少なくなることを願っています。

では、最後に皆さんに質問をします。皆さんは今、性的マイノリティについて何を考えますか。

会話は気持ち

浮島中学校　三年　久保田　葵

「来週、クラスに転校生がやってくる」

胸躍るような知らせと、タイミングよく休み時間が訪れた私たちのクラスは、どこもかしこも、この話題で持ちきりになりました。

どこから来るんだろう？イケメンだといいな。仲良くなれるかな？そんな話を友人としていたとき、誰かが先生に質問をしました。

「転校生って、どんな子ですか？」

「背が高い男の子です。三か月前に日本に来たばかりだから、日本語は勉強中だそうですよ。でも英語は話せるから、皆で話しかけてあげましょう。」

先生の話を聞き、私は不安になりました。

言葉がうまく通じないのに、仲良くなることはできるのでしょうか。英語、絶賛勉強中です。とうぜんですが、授業は受けているため、全く話せない訳ではありません。しかし、教科書の登場人物のように、話題を深めてスラスラとは話せないし、それ以前に、単語や文法がある程度正確でないと何も伝えられないかもしれません。そう考えると、どんどんと不安や焦りが押し寄せてきます。この状態のままは良くない。転校生が来るまで、あと一週間。その日から私は、いつも以上に英語を勉強しようと決心しました。

家に帰り、問題集を開こうとして、やめました。会話をしたいのに、文章と向き合うのは違う気がします。ならば、実際の日常的な会話を聞いてみ

た方がよいと考え、動画サイトで調べてみました。

すると、面白いものが見つかりました。それは、普段からよく見ていた方の、ゲーム実況の動画です。いつもなら、好きなゲームをもちろん日本語で実況している動画を選んでしまうため、気づいていなかったのですが、よく調べると、外国の方とのコラボ動画がたくさんありました。試しだと思って動画を開くと、そこには不思議な世界が広がっていました。英語、日本語、韓国語、いろいろな言語が飛び交っているのです。でもよく聞いてみると、カタコトだったり、単語を並べているだけだったりと、会話になっているのか分からない声も聞こえてきます。それでも、表情や声色から、楽しい、うれしい、という気持ちが伝わってきました。こういう会話をしたい。心の底から強く思いました。

どうすればこんな会話ができるのか。その答えは、彼らの態度が教えてくれました。

一つは、自分の気持ちや考えを、相手に伝えようとすることです。適当な表現が分からなくても、できる限り言葉を尽くしたり、身振り手振りなどの工夫をしていました。

もう一つは、相手の話を聞くことです。自分が分かる言語ならば、相手がカタコトでも気持ちを汲み取ってあげることはできるはずです。

私は、人との会話を固苦しいものと勘違いしていたのかもしれません。言葉や文化は違えど、皆同じ人間。壁など初めからないのです。話を楽しみたい、言葉が通じてうれしい、そういった「気持ち」があれば、言葉が正しくある必要はないのです。

一週間後、転校生がやってきました。日本語での自己紹介はとても流暢で、皆と話したいという気持ちが伝わってきました。

自己紹介の後、唐突に始まった質問タイムでは、皆がそれぞれ聞きたいことを、カタコトな英語と簡単な日本語で質問をして、その子も簡単な英語とカタコトな日本語で答えて。私が気づいたことは間違っていなかったのだと、皆の姿を見て自信が持てました。

放課後、部活に行こうとしていたとき、その子が不思議そうにこちらを見ていました。部活に興味があるのだろうか。

私は思い切って声をかけました。

「部活、club activity、一緒に行こう！」

「好き」という気持ちが

門池中学校 三年 對馬 里紗

「沼津の魅力」をアピールしよう。

みなさんも、今までに一度は考える機会があったのではないでしょうか。そういう私も学校の授業で何度か考えさせられたことがあるうちの一人です。私は正直、沼津は好きではありません。田舎だし、特にこれといって誇れるものもない、そう思っていました。だから、授業で「沼津の魅力」をアピールしようなんて言われてもピンとこないし、沼津のいいところを考える授業も好きではありません。私が考える沼津のいいところは干物、みかん、駿河湾、沼津港、お茶、東京に若干近い、などといったありきたりなものばかり。しかし「沼津なんて・・・・」そんなふうに考えていた私にあるとき転機が訪れたのです。それは、「ラブライブ!サンシャイン!!」との出会いでした。

「ラブライブ!サンシャイン!!」は沼津を舞台にしたアニメです。このアニメの中で主人公たちは学校廃校の危機を救うため、一生懸命に行動します。その姿がとてもかっこよく、私はすぐに夢中になりました。「ラブライブ!サンシャイン!!」は沼津の内浦地区にある「長井崎小中一貫学校」をはじめ、内浦地区全体をモデルにしています。モデルにしているので当たり前ですが、本当にそっくりです。キャラクターが描かれた観光船やアニメに出てくるお店はファンであふれかえっています。また、コラボタクシーや沼津まちあるきスタンプなど、「ラブライブ!サンシャイン!!」は内浦地区だけでなく沼津全体を盛り上げ、活性化しています。JR東海とコラボした「沼津ゲキ推しキャンペーン」というのも行われ、五百円以上買い物をするとオリジナルコースターがもらえるなどの多くのイベントがあります。私は両親に協力してもらい、コースターをゲットしました。こんなにも私は今、「ラブライブ!サンシャイン!!」の沼にハマっています。

改めて沼津の町を見渡してみると、沼津夏まつりやアスルクラロ沼津とコラボしていたり、沼津市民文化センターで映画の応援上映がされていたり、「ラブライブ!サンシャイン!!」はあらゆるところで沼津を盛り上げてくれていることに気づきました。

私は以前、沼津が好きではありませんでした。しかし、今では沼津で生まれ、沼津で育ち、沼津市民であることをとても誇りに思っています。今まではいくら沼津のよさをアピールされても全く心が動かなかったのに、なぜ「ラブライブ!サンシャイン!!」はこんなにも私を変えてくれたのか。それはきっと、「ラブライブ!サンシャイン!!」には人と人との触れあいが描かれているからだと思います。そもそも、なぜ沼津が舞台なのか。それは、監督の酒井さんが伊豆半島を一周していた中で沼津を訪れ、住民の優しさに惹かれたからだといわれています。アニメの中では沼津の特産物はもちろん、一生懸命なメンバーと地域の人との交流がたくさん描かれています。そして、登場人物の誰もが強い地元愛を持っています。私はその地元愛に触れることで、今までに気づかなかった沼津の魅力に気づき地元を愛することの大切さに気づくことができました。

たった一つのみかん。

今までそのみかんは、私にとって普通のみかんでした。しかし今では、みかん農家の方が農業用モノレールで収穫してくださっていることを知り、たった一つのみかんは、私にとって大切で大好きな「地元のみかん」になりました。

二〇十八年のアンケートによれば「ラブライブ!サンシャイン!!」のファンは沼津を平均二十回以上も訪問しています。実際、私も三月にアニメを見始めてから、気づけば十回もラブライブに関する場所を訪れていました。短期間に何度も訪れることができたのはこれこそまさに地元だからこその特権です。なぜ、ファンは繰り返し沼津を訪れるのでしょうか。それは、作品のファンと地元の人が「地元愛への共感」でつながっているからだと思います。私自身ラブライブをきっかけに沼津について考える機会が増え、両親と出かけることも多くなり、地元とのつながりや家族とのつながりが強くなりました。店先に置かれている交流ノートを通して、ファンの方とのつながりを感じて嬉しくなることもあります。

地域振興といえば、特産物を紹介したり、イベントを開いたりすることばかりをイメージしてしまいますが、人と人とのつながりを広げていくこと、そして地元に誇りを持ち、地元愛を持つ人が増えることこそが、地域を活性化させていく近道なのです。

あなたも沼津に夢中になり、自分を変える一歩、そして沼津を変える一歩を踏み出してみませんか？

僕の信じる道

今沢中学校　三年　日吉　優太

「負け戦はしない」これは僕のモットーです。どうせなら前向き、全力で取り組み、そのための準備と努力は惜しまない、そう常に心がけています。それは、何でもそつなくこなすと友達に思われている僕ですが、本当の自分は実はとほうもなく不器用で、メンタルが弱いからです。失敗するのではないか、できるかどうか不安で仕方がない気持ちが僕を動かします。

二年生の学年末テストで、僕は一つの目標を立てました。それは、社会のテストで一番を取ることです。コロナによる休校の時間を利用して、歴史の本を読み始めて以来、僕はその面白さにどっぷりはまってしまいました。テスト週間になるとかなり多くの時間を社会に費やします。しかし、本番に弱い僕は、凡ミスをしてしまうことも多く、分かっていたのに・・・という悔しい思いもたくさんしてきました。そこで今回は何としてでも一番を取ろうと計画を立て、分からないところは徹底的にやり直し、いつも以上に十分な準備をしました。いざ本番です。解答用紙は全部埋めることができました。あとは結果を待つだけです。テスト返却日。解答用紙が僕に返却され、開いた瞬間、心の中で大きなガッツポーズをしていました。点数の下のエクセレントの文字は、僕の勝利を意味していました。努力は最大の武器だと確信した日でした。

一方、準備や努力をしなかったのに、意外にも良い結果となったこともあ

ります。二年生の前期に広報委員を経験したときのことです。その始まりはじゃんけんに負け、仕方なく引き受けたという最悪の形でした。帰宅し、落ち込んでいる僕に気付いた母からの楽観的な励ましの言葉は、完全に他人事で僕の気持ちは全く晴れず、不安で埋めつくされていました。

しかし、その気持ちはあることがきっかけで一変します。それは、僕が広報委員として初めての放送当番の日でした。三年生の委員長は機械の使い方を丁寧に説明し、僕のサポートをしてくれました。その放送の後、彼女は僕にこう言いました。

「広報委員に入ってくれたんだね。話すのとっても上手だったから、入ってくれるといいなあって思っていたんだ。良かったあ。」

僕は一年生のときに一回だけ放送をしたことがあり、彼女はそのときの放送当番でした。たった一回、放送しただけの僕のことを覚えてくれていただけでなく、ほめてくれたのです。

「え、ありがとうございます。」

思わず笑みがこぼれました。このことがあってから、僕のやる気は全開になりました。その後も、僕が放送した後には、先生や友達が

「上手だったね。聞きやすかったよ。」

と声をかけてくれました。何より自分の話す声が学校中に響き渡っているのは、とても気持ちの良いものでした。自分の思いとは違うことでしたが、嫌がらず挑戦したことで、その先には、自分が想像していなかった景色が広がっていました

入念な準備と努力から勝ち得た社会のテスト。それと偶然にも良い結果を得た広報委員の仕事。入り口は違ったけれど、出口は同じ良い結果となった出来事でした。このように自分自身に良い結果をもたらせてくれたものは、どんなことにも、ふてくされず、まじめに取り組む姿勢だったのではないでしょうか。このことがもし、前向きに取り組まなかったらどうなっていたでしょう。おそらく努力はただの作業になってしまうと思います。作業になってしまったら、自分に身につくものはほとんどないでしょう。そうなったら結果は当然良いものではなくなり、自分はやってもだめな奴だと考えたり、運がないと思い込んだりしてネガティブな思いで頭の中がいっぱいになり、負の連鎖が続くことになります。努力は簡単にできることではないし、確かに長く続けることは難しいです。では、努力をポジティブな考えにするにはどうすればよいのでしょうか。僕はこう思います。努力をして良い結果をもたらした経験を思い起こすこと。その貴重な経験に気づくことで少し前向きな気持ちになり、負の連鎖はまたたく間に解けていくと思います。そして、努力が努力だと思わなくなってくれば、自分がもう一段階成長した証だと思います。

これから僕が選び歩んでいく道には入念に準備をしても、どんなに努力を積み重ねても、自分の思い通りにならないことや悔しい思いをすることが多々あると思います。でも地道な努力は、僕の人生の大一番で必ず僕に勝利をもたらしてくれる。そう強く信じて、これからも前に進んでいきたいと思います。

現代を生きる私たちだから必要なこと

市立沼津高等学校中等部　三年　長野　利菜

あるテレビ番組に出演していた二十代の人が、私たちの生活を変えたものはなんですか。という質問に対して、こう答えていました。

「スマートフォンですね。僕たち世代はスマートフォンがないと時代についていけないです。ＳＮＳがすごく流行っていますし、動画投稿アプリなどが今の若者の流行りだと思っているので。」

私もこの意見に共感できました。情報を集めるにもスマートフォン、友達と連絡を取り合うにもスマートフォン。私たちはスマートフォンやインターネットがないと生きていけないと思うからです。

皆さんはデジタルデトックスという言葉を聞いたことはありますか。最近では、デジタルデトックスを推奨するようなニュースもよく耳にするようになってきました。デジタルデトックスとは、スマートフォンやパソコンなどの使用をやめて、実生活における対面のコミュニケーションや、自然との繋がりに目を向けることです。完全に使用を断ち切るのではなく、一定期間だけデジタルと離れることで、より健全なデジタルデバイスとの付き合い方を目指すための取り組みです。この取り組みがとても魅力的に感じたので、私はこのデジタルデトックスに挑戦してみることにしました。

まずは、スマートフォンの使用を一日一時間に設定し、学習を目的としない場合の使用は控えるようにしました。このときは春休みだったので、部活動から家に帰ってお昼を食べると、すぐにスマートフォンを触ってしまいました。気がつくと、あっという間に一時間。このあと何をしようか考えてみても、なかなか思いつきませんでした。これが、常にスマートフォンに頼っている証拠だと感じました。デジタルデトックスの目的の中に、自然との繋がりに目を向けるというものがあったので、少し散歩に行くことにしました。外を歩いていると、いつもは意識しなかったからか、感じなかった春らしい暖かい風や、道端に咲いている綺麗な花。こんなにも私たちの周りには美しいもので溢れているのかと驚きました。その後、家に帰ってからも、できるだけスマートフォンには触らず、得意ではない料理に挑戦したり、部屋の掃除をしたり、読書をしたりしました。デジタルデトックスをしたことにより、いつもよりも自分の時間が持てるようになり、また違った自分に出会うことができました。その他にも、目の前のことに集中しやすくなったと感じました。今までは勉強をしているとき、家族と過ごしているとき、移動中など、様々な場面でもスマートフォンを持ち歩き、暇さえあれば色々なことを調べたり、友達と連絡をとったりしていました。しかし、スマートフォンの使用を制限するようになったため、持ち歩くことは少なくなり、勉強に集中できるようになりました。集中力が続くため、毎日勉強をすることが楽しいです。

皆さんは、常にスマートフォンやパソコンなどのデジタルデバイスを触っていませんか。これは、現在を生きる私たちだからこその問題だと思います。まずは少しずつスマートフォンなどを触る時間を減らして、色々なことに目を向けてみましょう。そうすることにより、今まで知らなかった世界が見えてきたり、新しい自分に出会う、よいきっかけとなったりするはずです。例え

ばスマートフォンでするオセロや将棋のゲームは、一人でも遊ぶことができます。しかし誰かと対面で行う実際のゲームはどうでしょう。相手の表情を見ながら、相手の考えを読み、あるいはコミュニケーションを取って駆け引きをするなど、対面でしか味わえない空気感や雰囲気まで楽しめるのではないでしょうか。

インターネットアドレスの最初についているＷＷＷの記号は「ワールド・ワイド・ウェブ」の略です。インターネットは居ながらにして私たちを世界と繋げてくれるのです。しかしデジタルデトックスは、私たちのリアルな日常や身近な世界に目を向ける機会になるのではないでしょうか。一人では取り組むことが難しくても、友達、あるいは家族と挑戦することで習慣化されてくると思います。

皆さんもデジタルデトックスに挑戦してみませんか。

三重のおばあちゃん

戸田小中一貫学校　九年　小村　剣太

ふと、最近寂しくなるときがあります。今はもういない、祖母の事を思い出して。今でも思い出します。祖母と楽しく話したことを。今でも思い出します。祖母と楽しく話せなかったあの日のことを。

私には家族がいて、その中に戸田の祖父と祖母がいます。いつも仲がよいとは言えませんが、毎日楽しく、感謝しながら生活しています。

そんな私ですが、三重県にも、祖母がいました。三重県の祖母に会うのは、お盆や正月くらいで、会うのは本当にたまにでした。三重の祖母は、いつも私が会いに行くたびに遊んでくれました。

「剣太！　トランプしよう。」

「うんいいよ！　やろうやろう。」

等と言いながら、とても楽しい時間を過ごしました。

しかし、私がだんだん反抗期になるにつれて、祖母とは、話しにくくなってしまいました。

小さい頃は、一緒に遊ぶ時間が楽しすぎて、あっという間に過ぎてしまいました。祖母と話したり、遊んだりすることが恥ずかしいなんて気持ちは、一ミリも無かったのに……。

私は小学五年生ぐらいの時に三重の祖母のお見舞いに行くことになりました。行くときは、祖母に会えるので、ワクワクの心でいっぱいでした。

（やっと、三重のおばあちゃんに会えるんだ。楽しみだなあ。）
しかし、いざ会ってみると、昔みたいに積極的に話したり、遊んだりすることができませんでした。
「剣太。よく来たね。おやつでも食べる？」
「……いらない。」
と、祖母が話しかけてくれても、下を向いてあまり話すことができませんでした。
「カードゲームしようよ。剣太。」
と言われても、下を向いて立っていることしかできませんでした。
心の中では祖母と遊びたい、話したい、という気持ちでいっぱいだったのに！
ついに私は、その気持ちを行動に移すことのないまま、祖母とは何もしないで戸田に帰ってしまいました。
そして、二年半の月日が経ち、私は中学一年生になりました。またその時も、三重の祖母のお見舞いに行きました。
（ようやくおばあちゃんに会える。今度はちゃんと話して、遊ぶんだ。前の分を取り返さなきゃ。）
そう思いながら三重に向かいました。
しかし、祖母のところに行くと、そこにはベッドに寝たままの、元気がない祖母がいました。体調が悪くなってしまい、昔みたいに遊んだり、話したりできる体ではなかったのです。
（五年生の時に、もっと遊んだり、話したりしておけば良かった。なんであの時に話せなかったんだろう。俺はなんてことをしてしまったんだ。）
私の心には後悔の気持ちだけが残りました。そして、その日の夜、三重のホテルにいるときに、父の携帯電話に電話がかかってきました。耳を傾けて内容を聞いていると、祖母が亡くなったということが分かりました。私はそのことを素直に受け止めることができませんでした。悲しくて悲しくて号泣しました。涙を止めようと思っても、もう、祖母に会えないと思うと、涙は止まりませんでした。私は心の中で叫び倒しました。
（もっと話せば！ もっと遊んでいれば！
もう、おばあちゃんには会えないんだ。）
と。私は、後悔と悲しみで心の整理がつかないまま、車で戸田に帰りました。車の中で、私は自分自身に嫌気がさしました。
私には家族がいます。戸田の祖父、祖母、父、母、姉。毎日ご飯を作ってもらったり、洗濯をしてくれたり、話したり、他にもいろんなことをしてくれます。まだ、一緒にいられる時間はあります。けれど、その時間はずっと続くわけではありません。
もう、三重の祖母の時のように、後悔はしたくない。大切な人との時間を大切にしていこう。失った時間は返ってこないから。

本当の多様性とは

加藤学園暁秀中学校　三年　南　綾音

近年活動が活発化している「SDGs」。その中でも、ファッション業界や公共施設での取り組みが話題になっている「LGBT」について、私は思う所があります。それは、あまりにも「公平な取り組み」を正当化しすぎなのでは、という事です。確かに、この問題を重要視するのは良い事ですが、今のLGBT関連のニュースや記事を見ると、どうしても「配慮しなければいけない」と感じてしまいます。公平な取り組みについて調べてみると、オールジェンダートイレ・飛行機内でのアナウンスの変更などが出てきました。オールジェンダートイレ、つまりLGBTトイレは、公共施設での男女別トイレ利用に不安や居心地の悪さを感じる人達のため、アナウンスは「アテンション・オール・パッセンジャー」と性差にとらわれないためだそうです。この記事を見てなるほど、と納得がいくと同時に、この配慮に対する違和感を覚えました。私は同性婚に反対する訳でもなく、トランスジェンダーに対しても偏見がありません。ただ、この配慮は社会全体が腫れ物のように扱っている結果のように思えました。私はこの疑問を父に相談しました。すると父は、「社会全体がLGBTに配慮しなければいけないのはなぜだと思う？そのような考えを持てる人が多くないからだよ」と言い、それに加え「皆がそのような意見を持っていたら、配慮しようと呼びかける必要もなかったんだ」と言いました。二つの言葉で、私は今までの待遇の残忍さに気付かされました。「死ねばいい」「存在価値がない」など、まるでその発言を正しいと思って浴びせていたり、外国では同性愛者を見たら殴ったりと、私には想像できないほど追い込まれ、苦しませている人がいると知ると、「理解・配慮をしよう」という言葉はそういった人に向けたものだと気付きました。そして、配慮する姿勢も必要だと思い始めました。

では、これからどのようにLGBTへの配慮をしていくべきなのでしょうか。まず、対策云々の問題ではなく、私達もLGBTの知識を増やすべきだと思います。そして偏見をなくすべきです。この事をするのが難しいと分かってはいますが、結局一番大事な事だと思います。また、日本では現行法の改定・改正などは行われているものの、同性婚をはじめとする決定的な法整備がされていません。海外では、同性婚を認める法律の施行や、結婚に準ずるパートナーシップ法が成立している国も増えているため、日本も対応を急ぐべきです。法律以外であっても、アジア最大級のプライドパレード（LGBT文化を讃えるパレード）が、台湾で開催されたり、アメリカでは表現の自由・人権・愛を具象化した祭典というものもあるそうです。日本でも一九九四年から「第一回レズビアン＆ゲイパレード」というプライドパレードが開催されていますが、私は調べるまでこうしたパレードを知りませんでした。また、ニュースになる事も少なく感じます。外国よりも知名度は高くはありませんが、常にこのようなイベントに対してアンテナを張っておく事も、周りに良い影響を与える方法の一つだと思います。

公共の施設においての配慮についてですが、私は今、配慮は特別あってもなくても正解はないと思います。ただ、配慮をする人にしても「傷つけない

ようにしよう」と気を遣いすぎないようにする事が大切だと思います。一方で、配慮を特別にしないという人も、他人を傷つけないようにという基本的な意識を忘れずに行動するべきだと思います。配慮を完全にしないという事ではなく、マイノリティの方へも、そうでない人達への理解・配慮を自然に出来たらいいのではないでしょうか。LGBTに限らず、沢山ある難しい問題について少数派・多数派の意見を尊重出来れば、社会は本当の意味での多様化となり、より生きやすくなるのではないでしょうか。

主　　催	沼津市教育委員会
講　　評	沼津教育振興会国語部部会長　　塩澤 清孝
後　　援	沼津市自治会連合会
	沼津市青少年を健やかに育てる会連絡協議会
	沼津千本ライオンズクラブ
協　　力	沼津市 PTA 連絡協議会 家庭教育委員会
	沼津市立金岡中学校　　和田 理世　　須藤 由衣
副賞提供	沼津千本ライオンズクラブ

青少年健全育成都市宣言

近年、青少年の非行が増加するにとどまらずその低年齢化と悪質化が著しいことは、誠に憂慮に堪えない。

次代を担う青少年の健全育成をはかることは私たち市民の重大な責務である。

よって、本市は市民の総力を結集して、青少年が明るく健やかに育つまちづくりに邁進することを決意し、ここに沼津市を「青少年健全育成都市」とすることを宣言する。

昭和 55 年 12 月 10 日

← 大会当日の様子はこちらから

令和5年度 第42回 沼津市わたしの主張大会

令和５年8月発行

沼津市教育委員会事務局生涯学習課

〒410-8601 沼津市御幸町 16 番1号

電話 055-934-4871

生涯学習課 Facebook ・ X